

2011.2.13

# Part2 シアターX カイ 批評通信

創造と批評とは対の芸術活動だと考え、2002年～2003年に  
 「シアターX批評通信」を刊行。今回また、Part2として2010年11月  
 「さくらのそのにっぽん」公演より復活・刊行しました。

(6)号



第9回シアターX「晩秋のカバレット2010

Xカイレパートリー劇場

## 『まつかなおひるね』

2010年12月1日(水)

料金: 前売3500円 シニア・学生2500円

高校生500円

(全席自由)

出演: 多和田葉子(作家)、高瀬アキ(ピアニスト)

照明: アイガワマサアキ

毎秋、シアターX恒例、たった一ステージのカバレットシリーズ。作家・多和田葉子による自作詩の朗読と高瀬アキによるジャズピアノの旋律が、劇場空間の中で渾然となつて戯れる。ベルリン在住の一人によるバトル・パフォーマンス。

### 「まつかなおひるね」の批評 なんておおきなはな！

孫 恵貞(ソン・ヘジョン 東京大学大学院生)

はじめて多和田さんを知ったのは帽子を作る人からでは、はじめて高瀬さんを知ったのは頭に毛のない人からだった。そのときわたしははじめて海を越え、見知らぬ街で手の届かぬことに強く惑わされていた。

一人を知ってからわたしは髪を伸ばし、帽子をかぶつた。それはどこかに落としてしまった自分の名を探すことに夢中になるきっかけとなつた。それから3年が経ち、はじめて一人の舞台を見ることができた。

一人が舞台上に現れると、風が吹き始めた。風は無数の顔をくり、喉から音を込み上げては振れさせ、指で音を紡いでは放し散らばる。観客は椅子に座つたままに現れた見覚えのある赤い靴を履かされ、風に揺られ踊り始める。そして息をのんで恐る恐る顔とい

舞台が終わってわたしは芽生えては咲き、散つて枯れ、また根をはる大きなはなたばを与えられた気分になつた。なんておおきなはな！そのあかいはなたばを抱え、立ち上がり、激しくたたき続ける両手を二人に捧げる。わたしは、今でも踊り続けている。



多和田葉子

作家。1982年からベルリン在住。ドイツ語と日本語で執筆を続ける。シアターXでは数々の作品が舞台化され、最新作は2010年11月「さくらのそのにっぽん」。またピアニスト・高瀬アキとのパフォーマンス「晩秋のカバレット・シリーズ」は2010年で9回目。

## 『まつかなおひるね』より抜粋

多和田葉子作

あかいそらに うかんでみえた  
わすれたはすの あのこ

わらい ふるえ やぶれて ゆがみ  
かけたとき

ねたみすら しらぬ すんだかぜよ  
いま そよげよ

よめぬ もじの くらいい まばたき  
きらめく はなびら

ひるの しきいつき とおくから  
おしゃみたいに なめらか

ながれきえる ゆめなのに  
まだ さめないでも いいさ

これが つれづれの  
ひるまに みたゆめ

だれにも わからなことばで  
つぶやくようなら  
つたえる きもなく  
つれないことば

「まつかなおひるね」の批評

## 音の出来事

原牧生（詩人）

この公演が高い舞台の上でなされ  
ているのをみると、客席との分離、  
観客からの距離が感じられ、こういう



多和田葉子さん 高瀬アキさん

やり方が本当に

ベストなのかとい

う疑問は考えら

れます。二人が

なきつてているこ

とには、パフォー

マンスという語

が定着する以

前、イベントとか

ハブニングとかい

われていたもの

のディスクが

それが洗練され

ると思います。

それが洗練され

て作品化され

て、公演して多く

も大事で必要だと思

う一方、できあ

がつた作品が提供される

舞台より、探

究のプロセスが公開され

ていているよう

なり方でもいいの

ではないかと思

ります。ロビーで素っ気なくやる

とか。ショーアップ的な演出みたいなも

のはなくいいと思

います。試みの本

質に関わるものだけいいと思いま

「まつかなおひるね」の批評

表れては消える白昼夢

横井一江（音楽ジャーナリスト）

多和田葉子と高瀬アキが、北ドイツ放送の番組をきっかけに「言葉と音楽」の共演を始めてから十年余り。シテーー的な要素を取り込んだ二人のステージを観ることが出来る年に一度の『晩秋のカバレット』、今回のテーマは『まつかなおひるね』である。ちよと不思議で、ちよと可愛くて

効果があるからだと思います。

それはさておき、舞台でパフォーマンス（作品）を上演するという発想だけ

は何かいいのかといえば、音の出来事

ではないかと思います。実際、この公演

は何がいいのかといえ、音の出来事

が実演されて、コトバの無意識が刺激

され、機知のはたらきが活性化し

て、それがたのしいことだと思います。

音の出来事は、言語としてかたまら

ない音や音節でもあり、別のものが同じ

ものであるという非論理、意味の偶然

性をきいてしまうこともあります。

お二人にとっての詩だといてもいいと

思います。こういうやり方の詩もある

んだと思えるような試みを期待した

いです。

中盤での高瀬のソロ・ピアノは一種のインテンションメッシュ、明快なタッチでビート感のあるジャズからフリーブレイ

まで自在に行き来する即興演奏を聴かせた。

締めは、高瀬が弾き語りするなか、多和田が唄うように朗読したタイト

ル作品「まつかなおひるね」。唄と朗読のズレはレイヤーを重ねたような効果をもたらす。異なる領域の表現者によるこのデュオの面白さは、共同作業でありながらも決して他方に寄り添うことがない、そんなところに隠されていると思った。

コワイ世界が表れては消えた。朗読と音楽というと、大抵の場合、小説家や詩人は朗読者にすぎなく、音楽家は伴奏者にすぎない。しかし、高瀬のビアノは作品を修飾するための音ではなく、一人のパフォーマンスは言葉と音楽によるインタープレイである。多和田が朗読すると言葉は二次元の活字からふわりと浮かびあがつて、ピアノに絡み合う。言葉の持つリズムやテンポと相まって、声もまた楽器として機能していく。テキストとサウンドが出会うことでの作品が立体的に表れ、イメージとして漂う感じは白昼夢の世界。シャガールの絵に描かれたモチーフのように、テキストの中のアンデルセンやカフカもまた浮遊している。

ロシアと自らをもうひとつ別の視点から  
の焦点を確立したと言ふのだ。そして  
クリークとの対極にある、文化果てる土  
地サハリンを知ったチエーホフはふたつ  
の今年、多和田葉子がチエーホフの『桜の園』から想を得て、  
全編“ひらがな”による戯曲を書き下ろし、イスラエルの演出家  
ルティ・カネルが演出する試み。

その水の涯に何を求めてチエーホフ  
は旅立つたのか、当時も今もなお物議  
を醸しているこのミステリーに、例え  
ば浦雅春氏は「かもめ」(岩波文庫)の  
あとがきで「権力的 세계관の獲得」  
という答えを提示している。都市モス  
クワとの対極にある、文化果てる土  
地サハリンを知ったチエーホフはふたつ  
の今年、多和田葉子がチエーホフの『桜の園』から想を得て、  
全編“ひらがな”による戯曲を書き下ろし、イスラエルの演出家  
ルティ・カネルが演出する試み。

その水の涯に何を求めてチエーホフ  
は旅立つたのか、当時も今もなお物議  
を醸しているこのミステリーに、例え  
ば浦雅春氏は「かもめ」(岩波文庫)の  
あとがきで「権力的 세계관の獲得」  
という答えを提示している。都市モス  
クワとの対極にある、文化果てる土  
地サハリンを知ったチエーホフはふたつ  
の今年、多和田葉子がチエーホフの『桜の園』から想を得て、  
全編“ひらがな”による戯曲を書き下ろし、イスラエルの演出家  
ルティ・カネルが演出する試み。

サハリンへ行きましょう！  
サハリンへ！ サハリンへ！

入市 翔  
(翻訳家)

『さくらのそのにっぽん』の批評

観ることで、‘自己’のみを軸とする円環的ドラマ、一人称的‘悲劇’の桎梏（しつこく）から脱却し、‘喜劇’『かもめ』を書けるようになつた。  
するとチエーホフは、自らの喪失を通して、自分探しに成功したことになる。

映画の終局、ワタナベが「僕はどこにいるのだろう」とつぶやくと共に、スクリーンは突然ブラックアウトし、数秒の間、映像が文字通り消失する。しかしその喪失感は、あくまで不安と虚無だ。

「さくらのそのにっぽん」千秋楽後に寄せられた批評・感想を掲載！



Xカレバートリー劇場vol.6

### 「さくらのそのにっぽん」

2010年11月17日(水)～23日(火)

料金：前売3500円 シニア・学生2500円  
高校生500円 (全席自由)

作：多和田葉子 演出：ルティ・カネル

出演(アクトー)：真那胡敬二、高川裕也、吉田敬一、谷川清美、山上優、キムテイ、庄崎真知

子／(ムーヴァ)：ケイタケイ、武井よしみち、石田知生、木室陽一、ハンダイズミ、佐藤学二、板津未来

演出助手：大谷賢治郎／企画文芸：佐藤京子、多和田葉子、ルティ・カネル、上田美佐子／

演奏：アヴシャローム・アリエル(イスラエル)／

照明：アイカワマサアキ／舞台監督：西村竜也／

イラスト：田村登留

シアターX4年がかりのプロジェクト。チエーホフ生誕150

だとすれば、この町が彼の考えるサハリンだろうか。

「かかとのない小説が、書きたかった。

かかとのない小説とは、自分の関わっている伝統を無視して自由に放浪する文学のことではない。かかとのない

文學とは、つまりが地についているかこそ、絶えずころびそうになつてゐられる文學ではないかと思う。そして、ころびそうな人間というのはわたしにとつては、どうしり座りこんでいる人間よりも、ずっと面白い人種なのだ。

（ブログ「すべて、ころんで、かかとがとれた」より）

『さくらのそのにっぽん』の登場人物たちは、まさしくこの‘絶えずころびそうな人間’に他ならないし、台本を読んだときや高瀬アキさんとの朗読パフォーマンスを観た際には、このような‘絶えずころびそうな’テンポから強い印象を受けた。

ところで今回の舞台だが、「自分たちはどこにいるのだろう」と問われているような‘漠とした不安’な雰囲気は、如実に描き出されていた。それは例えばアヴシャロームさんの演奏に顕著に表われていたし、ムーヴァたちの身振りもその様な行間を具現化していくだろう。しかしこの戯曲の白眉となるのは、聞き慣れた日本語が‘異化される’プロセスにあるのだろうし、そ

この文章を書くにあたり、多和田葉子自身のブログを拝見させていただいているのだから。

3



「さくらのそのにっぽん」の舞台写真

れ故にひらがなで書かれたわけだが、はたしてそこが“活かされる”舞台となつていただろうか。

足元がおぼつかないために、ころびそうになりながらも、何とかバランスを保つているラグビー・ボールのような予測不能なテンポで語られるときに、はじめてこの戯曲は生きるように思う。そしてそうした楕円球の生み出す運動は、『さくらのそのにっぽん』そしてチエーホフ劇の登場人物たちの生きる姿にも似て、どこか可愛らしくはないだろうか。

だからもうひとつ焦点を求めて、「サハリンへ行きましょう！ サハリンへ！」

多和田さんの戯曲はすごく個性的で、みごとなだけに、それに打ち勝つ肉体を持つのは大変。(その言葉の様に遊んだり、脱線したりできたら面白いのにー)とは言え多和田ワールドにひきこまれた1日でした。

(舞踊家 松永茂子)

● 多和田葉子さんのお仕事に本当の意味ではじめて出逢った気持ちで、『文藝』掲載の台本も、ひらがなの“小説”的意味など考えながら、味わいました。今年はチエーホフ生誕150年で、いろいろな舞台を見ましたが、この舞台はチエーホフをベースにしながら、これは多和田さんの世界なのだと感じました。 (演劇評論 斎藤偕子)

## シアターXに寄せられた感想

● 正方形な舞台。それをかこむ客席。ちよとリングの様でもあり——ちよつとワクワク——舞台が始まると巧みな言葉遊びの様なセリフの応酬、そのまわりを忙しく歩きつづけるパフォーマーの群。今を感じる簡潔な構成と演出にひきこまれた1時間半でした。

最後には奇妙に酸欠になりそうな自分に気づき、唖然としました。

多和田さんの戯曲はすごく個性的で、みごとなだけに、それに打ち勝つ肉体を持つのは大変。(その言葉の様に遊んだり、脱線したりできたら面白いのにー)とは言え多和田ワールドにひきこまれた1日でした。

同期: の文字が重なつてしまふ。むろんそれによつて言葉遊びが成立するわけですが、漢字表記を身にまとうた熟語がそこから脱しきれないと見えるのを、いささかもどかしく感じました。台本のひらがな表記を読むなら、おそらくかなり違つた想像力の刺激のされ方がありそうに思つたりしたものの。あるいは言葉遊びをさらにナンセンスに繰りだす方法もあるかもしれません。それこそケーシー・高峰の「動悸の桜」といつくだらなさまで取り込むようなら、小生につきまとつた漢字表記は解体するだらうかななどとあらぬことを考えたりしました。

後半から終わりの方では、ほぼ全員がかかるがわる”何か(誰か)忘れてきたような気がする”と言つてゐるのは何なのでしょう? そして、何故のみみは飛行機が墜ちると察知していに」と言つてゐるのでしよう?

● 言葉あそびの中の痛烈な日本社会への批判は小気味良く「そうそう、その通りですね」と同感することばかりではない。そんな言語習慣が身にしみてしまつてゐるせいでしょうか。それとも単一の表音機能を示しながら「ひらがな」がアルファベット言語とはどこか構造が違うということでしょうか。例えばドーキといえば、動機、動悸、

耳には「ひらがな」では入つてこないこと。いわば漢字混じりになるのを避けられない。そんな言語習慣が身にしみてしまつてゐるせいでしょうか。それとも単一の表音機能を示しながら「ひらがな」がアルファベット言語とはどこか構造が違うということでしょうか。田さんは、重くなりすぎないように平仮名という体裁をとられたのかしら?

後半から終わりの方では、ほぼ全員がかかるがわる”何か(誰か)忘れてきたような気がする”と言つてゐるのは何なのでしょう? そして、何故のみみは飛行機が墜ちると察知していに」と言つてゐるのでしよう?

半紙に書かれた言葉をムーヴァーの方々が、とても大切そうに扱つて動きをしていらしたのがとても印象的でした。あれらの文字(言葉)は観客の方々が書いたものだったのですね。半紙には、平仮名一文字が良かつたナと勝手に思つております。地面上に散つた文字が隣の文字と出会つて、何か言葉が生まれたり……とか。

なお、ケイタケイ氏の大車輪、演奏家一人による音楽効果を強く印象づけられつつ、私たちにとって、いや私は

● 『さくらのそのにっぽん』11月21日昼公演を拝見。観客を周囲に配した舞台設計は刺激的な空間でした。

とつて桜の園とは何だろう。そして、それはどのようになつてゐるのだろうと考えさせられました。

(編集者 面谷哲郎)

—— 今日の作品はフランスでは非常に有名なサッカーの試合に由来しているのですが、その試合についてフィリップ・トルシエさんにお話していただきます。

出席 … フィリップ・トルシエ(元全日  
本サッカー監督)  
勅使川原三郎(ダンサー)  
ピエール・リガル(演出・振付・  
出演)

かつてフランスを揺るがしたサッカーの試合の記憶を「コンテンポラリー・ダンスとして表現した舞台。公演後に、フィリップ・トルシエ(元サッカー日本代表監督)と勅使川原三郎(ダンサー)らをスペシャルゲストに迎えてのトークが併催された。



東京日仏学院 主催

### 「ロス・タイム」

~コンテンポラリー・ダンスとサッカー~  
2010年12月10日(金)~12日(日)

料金:前売2,000円 当日3,000円 東京日仏学院会員  
2,000円

振付・演出:ピエール・リガル(カンパニー)

スペシャルトーク:フィリップ・トルシエ、勅使川原三郎

—— その試合のフランスチームと西ドイツチームはまったく対称的でした。西ドイツチームの選手は大きな体格をしていて、非常に激しく身体をぶつけてくるようなチームでした。それに対してフランス選手は若く、テクニックの面で優れているチームでした。そういう対称的なチームが戦った試合でし

トルシエ 基本的にはこの試合をよくご存じだと思いますけれど、フランスサッカーにとって特に悲しい試合です。(1982年 スペインで開催された第12回 FIFAワールドカップ準決勝のフランス対西ドイツ戦)

エール・リガルは当時9歳でしたが、テレビでこの試合を観戦し非常な挫折感を味わったということです。1982年のフランス人と同じような挫折を、2006年のワールドカップ日本対オーストラリア戦で日本人も感じたのではないかと思います。日本チームはリードしながらも相手に2点を奪われて、結局は決勝トーナメントに進出できなかつたという失望を味わいました。

—— 勅使川原三郎さんはサッカーの大ファンだそうですね。

た。当初、フランス人は頑強なドイツ選手に対して無力ではないのかと考えられていました。しかし、この試合はフランスでは神話になりました。この試合は延長戦の終了10分前の時点でのフランスチームが3対1でリードしていました。しかし残り10分間で西ドイツチームが同点にして、PK戦に持ち込みました。結果西ドイツチームがPK戦を制し、勝利しました。

た。

**リガル** 1982年のワールドカップのフランス対西ドイツ戦をテレビで観戦しました。その時、私は9歳でした。あの試合は意外な展開の連続で、結局どんでもない結果となりました。それで私は泣いてしまいました。その後の失望感をそれからずっと持ち続けてきました。負けたことの悔しさだけでなく、西ドイツ人に対するある種の差別意識さえ持ちました。

ただのサッカーの試合なのに、なぜこういう感情が生まれたのか、それが不思議でした。20年後、25年後になんでもその挫折感が残っていることに、恥ずかしさを感じもしましたが、やはりその記憶は変わらないまででした。そして、みんながあの試合のことを覚えているのです。20年、25年経つてもいろいろ人の記憶の中にある試合が残っていることに気づきました。この作品のテーマの一つは、幼い頃の記憶ということです。

**勅使川原** そうですね。サッカーは大好きです。この試合は特別な試合として覚えてています。今夜の作品『ロス・タイム』はフランス人の感情的

なものを表現していると同時に、とててもアイコニカルな作品もあると思います。作品の中に当時のテレビ中継の実況アナウンスが何回も出てくるということは、あの試合がどれだけ重要な試合であったのかということだと思います。

**観客** 新しい身体の動きの可能 性ということで、この作品はどういうふうにダンスと結びついているのか教えてください。

**リガル** 私は少年の頃、たくさんのスポーツをしていました。サッカーだけではなくて陸上などもしていました。その経験を使っています。例えば、スポーツ選手はサッカーならゴールを入れるという目的を持って身体を動かします。その目的ゆえに動きが美しいのです。ですから、私もそういう動きとして演出しました。

**勅使川原** この作品の中のダンスは面白かったです。照明も舞台のところ方も面白かったのですが、とても好意を感じたのは出演者たちがいわゆるダンスのボキャブラリー（語彙）をほとんど使わなかつたことです。出演者のスタイル（静的）な身体の動きで、すべてを構成していたことがユニークであるし、それは大切なことです。これをただのチャレンジにするのではなくて、さらに発展させることができだと思います。

私はこの作品にサッカーの試合のような感覚を持ちました。つまり、試合が始まるとどうなるのか分かりませんが、それと同じように、ある意味で

この作品はどうなるのか分からない内容だったから、それが面白かったです。その辺りのことをフライリップ・トルシエ氏からも伺いたいです。

**トルシエ**

サッカーについては、日本とフランスなどヨーロッパサッカーとはとても違うということを強調したいと思います。そして忘れやすいことは、みなさんの注目がボールの動きに向かいがちですが、そのボールを蹴っているのは結局人間であるということです。人間は身体と身体をぶつけ合います。今夜のこの作品は、そういう人間らしい身体のぶつかり合いが表現されました。そういう身体のぶつかり合いを忘れるがちなのですが、サッカーとほ「人間が主役のスポーツ」なのです。

先ほど、日本とフランスやヨーロッパのサッカーは違うと言いました。そのヨーロッパの中でも、特にイタリアは体当たりが強く、シャツを引っ張つたりします。日本人はそういうサッカーに慣れていないと思いますけれど、それが実際のヨーロッパサッカーです。ピエル・リガルは『ロス・タイム』の中でそのことを上手く演出していたと思います。

## キャスト・オーディション

シアターXプロデュース あえて、小さな『魔笛』 歌ドイツ語・台詞日本語上演  
(公演: 2011年8月19日~21日)

[オーディション日時] 2011年3月28日(月)10:00~13:30  
[オーディション会場] シアターX劇場 [応募締切] 3月25日(金)  
[お問い合わせ・応募先] シアターX



2010年8月公演の舞台写真

## 2011年 第2期パフォーミングアーツ塾 塾生募集

モーツアルト『ドン・ジョバンニ』公演予定(2012年2月初旬)

[開講] 8月5日より 毎週金曜日 18:00~21:00  
[講師] 渡邊明、高折績、西野薫 [コレベティ] 山口佳代、経種美和子  
[指導] スティーブン・シャレット [演技指導] V.ニジェリスコイ  
[応募締切] 3月23日(水) [お問い合わせ・応募先] シアターX



2010年1月、第1期生による『フィガロの結婚』全幕上演の舞台写真

## シアターXで開講されている塾・研究会・ワークショップ



(音楽塾講師)  
西村弘治氏

- 貴重な映像を見る会(2011年春開講予定) 劇場空間でカントル、ヤン・ファーブル・ベルイマン、ヤン・ペシェク、郡司正勝、つかこうへい…などの優れた舞台、思想を映像を見ることで再考する。
- 音楽塾Part.2 講師: 西村弘治(音楽評論家)クラシック音楽の名盤LPを劇場空間で聴く!  
次回: 3月28日(月)19:00 バガニーニのヴァイオリン協奏曲第1番とロッシーニの「スターバト・マーテル」
- パフォーミングアーツ塾 オペラ歌手を対象にし、2012年2月『ドン・ジョバンニ』全幕公演を目指す。
- チェーホフ研究会 毎日1回予定 大学の研究者、俳優、チェーホフに共感し関心をもつ方々が参加し、活発な議論や朗読などを行う。
- 大雁気功 毎月3回(木曜)18:30~21:00 講師: 中川進  
中国でもっとも長い歴史を持つ気功。美しい所作を身につけ、いまを生きる心身の糧として

「フィガロの結婚」研修雑感  
渡邊 明(声楽家)

「フィガロの結婚」の批評

1年間に渡りモーツアルト「フィガロの結婚」をイタリア語の「台本」よみに始まり、歌唱・舞台動作の訓練を経たシアターX「パフォーミングアーツ塾」と贊助出演者による、新春オペラ公演(イタリア語による全四幕上演、日本語字幕)。どのように歌うがだけではなく、なぜ歌うのかを目指しての3ステージ。

を得て、恙つうがなく打ち上げられた要因は、勿論受講生たちの積極的な研修努力に負うところが大きかったことにもよりますが、それ以上に経験豊かな助演陣や、熟達したコレベテイの人達の支えがあつたればこそそのように思われます。その意味で受講生たちは、この研修で誠に贅沢な体験



2月8日公演の舞台写真

2月9日公演の舞台写真

2月10日公演の舞台写真

Xカイレバートリー劇場2011vol.1

「フィガロの結婚」 2010年1月8日(土)～10日(月)

料金:前売3000円 シニア・学生2000円 高校生500円(全席自由)  
作曲:W.A.モーツアルト／指揮:スティーブン・シャレット／ピアノ:山口佳代／  
演出:藪西正道／音楽指導:高折績、渡邊明、西野薫／演技指導:Vニジェリスコイ  
／照明:矢口雅敏／衣裳:鳥居照子／舞台監督:西村竜也

[各ステージの出演者]

- 8日:藪内俊弥、新井千恵、入手千里、亀岡聖子、新井健士、水島正樹、小柳綾、高橋安紀、福間章子、小田川哲也、沖野孝穎、安保克則、片山将司、京島麗香、川原千晶、関口桃子
- 9日:渥美史生、荒牧小百合、高橋祐樹、高橋さやか、金田葵、樺沢わか子、片山将司、志田雄二、沖野孝穎、小田川哲也、関口桃子、高橋安紀、新井千恵
- 10日:藪内俊弥、中川越百、高橋祐樹、末千絵、細野由香里、福間章子、小田川哲也、安保克則、志田雄二、片山将司、川原千晶、高橋安紀、京島麗香

[合唱のみなさん]

工藤紘子、竹本あづみ、稻富磨里、大山綾子、川名綾子、橋マキ、太田みのり

ができたのではないかと考えます。

今回のオペラ研修の企画については、特徴的な次の点に於いて特別な意義を感じます。まず、研修方法をパートリー・システムに置き、オペラ一曲を全幕通じて研修出来たこと。これにより、オペラに於ける最も重要な部分の研修所等で取られている研修方法で、オペラの全体像を習得させることが可能になります。オペラがオペラハイライト形式による部分研修に終始せざるを得ない情況にあります。

もうひとつは、研修演目をモーツアルトの「フィガロの結婚」としたことですね。周知のようにモーツアルトのオペラには、ヨーロッパ古典主義の美の骨格としての秩序と人間性が兼ね備わっています。特にモーツアルトの最もすぐれたと言われる三作品「フィガロの結婚」「ドン・ジョヴァンニ」「コシ・ラ・アン

・トゥッテ」はモーツアルトが初めてダ・ポンテという本格的な台詞作家を得て完成させた作品です。そのことから多くの様に音で綾取つかを知ることは、勿論受講生たちの積極的な研修努力に負うところが大きかったことにもよりますが、それ以上に経験豊かな助演陣や、熟達したコレベテイの人達の支えがあつたればこそそのように思われます。その意味で受講生たちは、この研修で誠に贅沢な体験

ら始めたのでした。

モーツアルトの最も円熟した名曲は、モーツアルトの生涯最後の10年間(1780年～1790年のウィーン時代に集中していると言われます。「フィガロの結婚」も1786年に作曲初演されたものです。その「フィガロの結婚」は本来はボーマルシェによる革命的な劇ではあります。ダ・ポンテの台詞とモーツアルトの音楽により、比類のない人間性のオペラとなりました。たとえば伯爵の直情的な単純さ、伯爵夫人の女性の哀しさ、スザンナのチャーミングな素直さ、「フィガロの機敏な賢さ、ケルビーノの夢想的な情熱など、モーツアルトはそれらを音楽により人間の持つ多様な表情に生き生き表現し、シェイクスピア劇に比較される程の傑作として完成させていると言われます。であればこそオペラ「フィガロの結婚」は、今回の研修公演の目標とする「なぜ歌うのか、どのよううに歌うのか」に最も相応しい演目であったと言えます。

しかしそれらはともかくとして、今回研修公演に於いて何よりも特筆すべきことは、この企画に相応しい劇場空間がそもそも用意されてあるという、誠に恵まれた環境にあつたことです。この度の成果は、シアターXというモーツアルトのオペラの機微を問近

に味わうに適した空間と、この企画に掛けたプロデューサーを始めとするスタッフの方々の熱意が相まってのものであったといえましょう。

「フィガロの結婚」の批評

レチタティーヴォの素晴らしさ

本多宏子（両国幼稚園）

モーツアルトのオペラ・ツツニアの醍醐味をたっぷりと味わうことができました。

美しいアリアへの前座的役割に甘きがちなレチタティーヴォが生き生きと楽しめる大きな存在であることを見識でき、ピアノ、声のアンサンブルなどすべてに、一年かけてのイタリア語研修、演技指導などの成果が現れていました。ご成功おめでとうございります。ただ、もう少し歌詞の訳を字幕にしていただければ、もっと楽しめたと思います。

「フィガロの結婚」の批評

「フィガロの結婚」

——シアターX公演の衝撃!!

倉田大介（弁護士）

2011年の年明けの1月10日、シ

アターX「フィガロの結婚」（3回公演）の最終公演を聴きました。衝撃的でした。全曲ということで長丁場でした。が、若い（と思われる）歌手の皆さんのが歌唱は最後まで衰えず抜群の安定感がありました。また、なじみのアリアもあり、時間を感じさせずに最後まで歌とストーリーを楽しむことができました。

スザンナの困惑、フィガロと伯爵との駆け引き、伯爵夫人のやさしさ、ケルビーニの剽軽さなど、他の歌手の皆さんも含めてそれぞれの登場人物の持ち味が生き生きと描き出されていました。オペラの全曲を聴く機会はほとんどないなかで、日本におけるオペラの可能性を感じさせてくれました。

私自身は、以前に、カルメン（イギリスの歌劇団）だと記憶しています）の公演や3大テノールのコンサートに行つたことはありますが、熱心なオペラファンということではありませんでした。しかし、数年前にある縁で西野薫さんと知り合って改めてオペラの魅力を感じるようになってきたところです。今回のコンサートに出会い、シアターXの企画と歌手の皆さんとの水準の高さを改めて感じました。

さらに加えて言いますと、今回の公演は、小ホールでのピアノ伴奏のコンサートであつたにもかかわらず、ピア

ノも素晴らしい、全体としてスケールの大きさを感じました。素人判断ですが、是非、何時か、大ホールで、フルオーケストラ（難しければ中編成でも）での公演を実現し（異なる準備と鍛錬が必要かとは思いますが）、多くの人にオペラの感動を味わつてもらえないものかと考えたりしています。楽しい感動のひとときに乾杯！

「フィガロの結婚」の批評

「モー」さんからのお年玉

前田民敏（中高年バイク親父）

オペラ初心者の自分に新年早々波乱の幕開けを予感させるにはふさわしい「フィガロの結婚」の観劇のお誘いを頂戴した。

されどオペラ。どうにも一人での参 加は敷居が高く友人を誘つて三人連

れで両国シアターXへ。

今回で二度目のお邪魔となるがい つもながらの殺風景な外観ではある が扉をくぐるとなかなかどうして素 敵なロビーと小さいながらも雰囲気が ある素敵な劇場です。座席は大方埋 まつておりご多分にもれず観客の大半が女性で中年男性三人連れは旗 広いとは言えない席に座り、このま

ま三時間に渡るイタリア語の観劇に果たして耐えられるだろうかと不安を持つて臨んだのが正直なところ。しかしながら終わつてみれば何ともあつという間に3時間が過ぎていました。エネルギー的に劇を演じる方々はテンポの速い台詞を見事に操りイタリア語が心地良く頭の中を揺らします。更に初っ端から素晴らしい音で客の心をビンと弾いたピアノ奏者は最後まで変わること無く劇をリードし、お見事でした。

両国の地で角界に例えるなら将来幕内を張るであろう方々が過酷な稽古を積んで迎えた初場所とでも例えられるか。

もうひとつは字幕の妙。心地よいイタリア語を意味もわからず聞いていれば途中の気絶は必至であろう。また映画並みの字幕の煩わしさではなくて疲れこれまで氣絶。

しかし今必要な字幕はしっかりと必要でない時はそれなりに集中削除がないそのさじ加減が絶妙で、飽きさせない配慮が意図されたものだとすると、相手は相当な手練れであろう。演者、音楽、演出と三拍子そろつた感のある演劇は久しぶりだったが、これを生み出すのも現代にまで及ぶモノ——アルトの魔力なのか。

# シアターXカイ 批評通信

演劇がなされている事にどれだけの認知があるのか。往時には激的な書きも、現代では引き付ける弱さを感じてしまうのは否めないが、素晴らしい歌を身近で感じたい欲求はいつも誰もが持っているものだと思う。その武器を更に活かす意味では、客いじりも辞さない演出等が必要かもしれない。

素晴らしいものを見せてくださった方々に明るい未来が待つてることを願っています。新年早々、お年玉を貰った気分でした。どうもありがとうございました。

〔「フィガロの結婚」を今幕上演を振り返る〕

## シアターXオペラ「フィガロの結婚」パフォーミングアーツ塾を終えて

藤西正道（演出）

⑤12月25日より集中稽古1月3日より通し稽古・P・本番。

○11月内部発表までの稽古

オペラ歌手の演技力の向上を目的に塾を開始するが、塾生は学生からキヤリアを始めたばかりの歌手の卵まで、様々なレベルの歌手を同時に教育するまさに実験工房となつた。

歌唱表現 演技の基本となるイタリア語の台本読みに時間かけ内容把握を徹底する。途中音楽稽古では週1回の稽古のためか譜読みが遅れる者が多くみられた。特にレチタティーヴォの音取りにはかなり時間を要した。

ヴィクトル・ニジエリスコイ氏の身体表現法も同時に進行するが、普段体を動かすことの少ないオペラ歌手には厳しい指導と受け取る者と喜んで参加する者とに分かれた。しかし、後期題材が「フィガロの結婚」に移ると彼の意図した事を理解する者が増えた。身体表現と具体的な演目課題（フィガロ）による授業が一番効果的であった。

○稽古期間

①昨年2月よりイタリア語の台本読みを始める。

②4月より音楽稽古を開始する。同時にヴィクトル・ニジエリスコイ氏の身体表現法が始まる。

③7月より立ち稽古開始。アリアテストにより11月中旬発表の配役決定。

④11月4日と5日、劇場にて内部発表。本公演の配役を決定。

## ○本公演までの稽古

昨年12月からは俳優ヴィクトル・ニジエリスコイ氏と共に本公演に向けた演技指導を始める。テーマは権力への

対応と女性の知恵とする。塾生たちは柔軟に対応するが、逆に助演歌手はこの時期での演技変更はあり得ないと当初不満を表す者もいた。日本では稽古効率を優先させるために演出家からの段取りを守り、その段取りの意味さえ考えずに演技することが多いためだ。

オペラ歌手は歌唱表現を優先させ

る傾向にあるが（本来は演技と一致するものが）歌唱寸前までの演技または歌唱中の演技をヴィクトル・ニジエリスコイ氏はかまわず歌手に要求した。演技が生まれるまでの過程を演出意図から解釈し各役者が考え具體的な演技を生み出すようアプローチして行く。

音楽スタッフからの「音の間を生きず演技を」との忠告にも我々は柔軟に対応した。1月3日より劇場に入り通し稽古前に、考えた演技の中から生み出された段取りに、段取りのための演技にならぬよう全員で確認する。

○本番を終えて

劇場を10日以上使用できたことは何よりの贅沢であった。本番の舞台で実寸の稽古ができるることは役者の最後の感性に訴えた。舞台セット・照明も納得のいく調整ができた。

3日間の本番ともそれぞれに好演であった。皆が個々に何をすべきかを把握しているために、まさに歌劇としてのオペラを観客は見たのである。中日終了時に上田さんより「アンサンブルがよかつた」との言葉を頂くが、演技面でのアンサンブルこそオペラに必要なものであろう。

歌唱技術で序列のあるオペラ界は音楽アンサンブルを第一に考えてきたが、その結果、歌唱技術を最優先に考える学生や若いオペラ歌手、一部の歌唱技術を理解した客のみのものとなつていった。

今回の公演は演技面の強化が歌唱表現にも良い影響を及ぼしオペラ役者としての個人レベルを上げることに成功した。歌唱技術が優れた歌手が必ずしも良い評価を得られるわけではないこともわかった。初めて3時間のオペラを見たお客様の声を聞く限り明らかである。

ヴィクトル・ニジエリスコイ氏の演技指導のお陰で、段取り・型から脱出し始めたパフォーミング・アーツオペラはスリルのある演劇要素を増し、また劇場舞台・照明・簡素な舞台セットも時間かけて調整した結果、私自身が予想もしなかつたオペラの新しい可能性、本来ある姿を取り戻したと確信した。

**1月** 8日(土)～10日(月) Xカイレパートリー劇場2011vol.1

『フィガロの結婚』全4幕(イタリア語上演、日本語字幕) 作曲:W.A.モーツアルト 指揮:スティーブン・シャレット  
演出:藪西正道 ピアノ:山口佳代 音楽指導:高折縞、渡邊明、西野薫 演技指導:ヴィクトル・ニジェリスコイ

**2月** 21日(月)～22日(火) 東京日仏学院

『苦惱』(フランス語公演) パトリス・シェロー演出作品の日本初公演!  
作:マルグリット・デュラス 主演:ドミニク・ブラン



**3月** 3日(木)～6日(日) Xカイレパートリー劇場 2011vol.2

『ものみな歌でおわる』——かぶきの誕生に関する一考察  
原作:花田清輝 演出:ヴィクトル・ニジェリスコイ

8日(火)～13日(日) 第32回シアターX名作劇場

『ドモ又の死』作:有島武郎 『眠駒駄物語』作:岡鬼太郎 企画・演出:川和孝

**4月** 14日(木)～17日(日) フランス演劇クレアシオン

『天国への二枚の切符』作:ジャン・ポール・アレーグル 翻訳・演出:岡田正子

29日(金)～5月1日(日) Xカイレパートリー劇場 2011vol.3

オペラ『カヴァレリア・ルスティカーナ』

作曲:ピエトロ・マスカーニ 演出:藪西正道 指揮:スティーブン・シャレット  
演技指導:ヴィクトル・ニジェリスコイ 演奏:アンサンブルXカイ

**5月** 20日(金)～25日(水) ギィ・フォワシイ・シアター

『私もカトリース・ドヌーヴ』作・演出:ピエール・ノット 出演:観世葉子、高橋和久他



**8月** 4日(木)～7日(日) 日露コラボレーション公演

『シベリアに桜咲くとき』(ビーブルシアター + ロシア・ミヌシンスクドラマ劇場)  
作:ネリ・マトハーノワ 演出:アレクセイ・ペセゴフ / 森井睦

19日(金)～21日(日) Xカイレパートリー劇場 2011vol.4

オペラ あえて、小さな『魔笛』——大人と一緒に子供も愉しめる本格オペラ  
作曲:W.A.モーツアルト 演出:藪西正道 演技指導:ヴィクトル・ニジェリスコイ  
\*出演者オーディションを3月28日に実施(お問い合わせはシアターXまで)

(予定)『ピーターパン』演出:クロード・シルサルチック(ポーランド)

**9月** 13日(火)～18日(日) 第33回シアターX名作劇場

『恥』作:藤沢清造 『うす雪』作:川村花菱 企画・演出:川和孝

21日(水)～25日(日) 劇団俳小

『プラトーノフ』作:チェーホフ 演出:ウラジーミル・ベイリス



**10月** ポーランド・ワルシャワ/ズヴィグニエフ ラシエフスキー劇場

『The Chorus of Women』コラスシアター 構成・演出:マルタ・ゴルニチカ

10月～11月 東京日仏学院

女形～モリエールの国から～(フランス現代演劇+パフォーマンスの3作品)

出演:ジョナタン・キャブドゥヴィール、ジャン・クロード・ドレフィス、フィリップ・メナール

**11月** 9日(水)～13日(日) 東京ノーヴイ・レパートリーシアター

『白痴』——ドストエフスキイ生誕190年記念 構成・演出:レオニード・アニシモフ

20日(日) 第10回シアターX晩秋のかばレット2011 Xカイレパートリー劇場 2011vol.5

出演:多和田葉子(作家)+高瀬アキ(ピアニスト)

(予定)『ライロニア』劇団KANA(ポーランド・クラコフ)

**12月** 13日(火) Xカイレパートリー劇場2011vol.6

両国の『第九』コンサート 作曲:L.V.ベートーヴェン 演出:藪西正道 指揮:スティーブン・シャレット ピアノ:山口佳代

\*新企画・出演者公募! 両国に在勤・在住の方々が Xカイレパートリー劇場のスタッフ・キャストと共に歌う

そして2012年は……

『さくらのそのにつぽん』 チェーホフ原作 多和田葉子書きおろし“ひらがな”戯曲に再びの挑戦

『ものみな歌でおわる』9年目の花田清輝企画

『第10回シアターXカイ国際舞台芸術祭 IDTF』メインテーマ 月夜でのんしんばしら——賢治(仮)

『バベル』懸案8年 日・イスラエル・韓・中 共同企画 いよいよ始動!

第32回シアターX名作劇場